AMCoR
Asahikawa Medical College Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

旭川医科大学研究フォーラム (2001) 2巻1号:88-89.

学会の動向:第12回日本生命倫理学会の報告と将来の展望

岡田雅勝

学界の動向

第12回日本生命倫理学会の報告と将来の展望

岡　田　雅　勝*

第12回日本生命倫理学会年次大会が2000年11月３日(金)、４日(土)の２日間、旭川医科大学の主催で500名以上の人々を集めて、旭川市大雪クリスタルホールで開かれた。大会長は岡田雅勝(一般教育哲学教室)であったが、第一内科の菊池健次郎教授に大会の準備委員会長を引き受けて頂いたのをはじめ、副学長の牧野勲教授、片桐一教授、第一内科、第二内科、第一外科、第二外科、皮膚科、脳神経外科、法医学の教授に準備委員を引き受けて頂き、そして第一内科の羽根田俊先生、それに一般教育の事務官に事務局を引き受けて頂き、安孫子保名誉教授に事務局の運営を委ねた。

もとより本学会は学際的な学会であって、医学・看護学系、哲学・倫理学系、法学・経済学系、社会学・文化人類学系の四つの分野にわたって、それぞれ専門領域において議論ができるようになっている学会であって、今はこのような学際的な学会としては日本で最大の学会である。会員はおよそ1,200名である。この学会を開くにあたり、実行委員会を設定し、その委員は全国から選んだが、北海道で学会が開かれるというので、地元からは、菊池健次郎先生、安孫子保先生、羽根田俊先生、橋爪裕子先生、旗手俊彦先生、それに松岡悦子先生の６名とした。実行委員会(委員長岡田雅勝)を慶応義塾大学で開催し、第12回日本生命倫理学会の総合テーマを決め、「医療情報と生命倫理」とした。そしてシンポジウムを２つ、ワークショップを６つ、それに一般演題、さらに特別講演をすることとした。また新たにランチョンセミナーを開くこととした。実行委員会は３回にわたって開かれ、その詳細が決定したのは３月の下旬であった。

その内容はつぎの通りである。「医療情報と生命倫理」の総合テーマのもとに、シンポジウムとして、「生命倫理のグローバリゼーションについて」と「ヒトゲノム問題と生命倫理について」を選んだ。「生命倫理のグローバリゼーションについて」に関しては、生命倫理をグローバルな見地から取り上げてみたいと考えて選んだ。生命倫理は、バイオエシックスが米国を中心に発展し、今や世界中の関心事になっていて、そのなかで、日本の果たす役割が大きい。そこで今回はさしあったて、日本がアジアにおいて果たすべき問題に絞って扱うこととした。特に医療と倫理に関連して、人口問題、自然環境問題、南北問題の解決等の問題があり、アジアにおける患者の人権を擁護し、パターナリズムを廃止し、患者の自己決定権、プライバシーの権利をかちとるとともに、リプロダクティブ・ヘルスを実現し、妊娠・出産の安全性を高め、受胎調整の知識や手段を普及させるとともに、女性の地位の向上を図ることが肝要で、さらに発展途上国では，経済問題も絡んで、住民たちの健康問題にも格差がでてきて、こうした問題が、さまざまな政治問題、社会問題、環境問題を生み出している。それゆえ、生命倫理のグローバリゼーションをこうした問題の解決のために、さしあたってアジアという身近のところから考えていきたい、という発想から、これをシンポジウムのテーマとした。

このテーマを推し進めるにあたり、青山学院大学の坂本百大氏と札幌医科大学の旗手俊彦氏に司会をお願いし、シンポジストは、国際厚生事業団の我妻堯氏、国立環境研究所の大井玄氏、青山学院大学の佐藤節子氏とした。話は開発途上国を中心になされ、生命倫理のグローバリゼーションが論じられた。

次に「ヒトゲノム問題と生命倫理について」に関してであるが、ヒトゲノムの研究は、米国 NIH を中心に「ヒトゲノム計画」がなされ、2002－2003年にその完成がもくろまれていて、すでに「ヒトゲノム配列」の概略が読み終えたとされている。人間の生命現象の解明のためには、人間の遺伝子の個々の機能、遺伝子間の相互作用、その階層性、さらにネットワークが解明されなければならない。ヒトゲノムを知ることは、

＊旭川医科大学名誉教授　哲学

ヒトを形成する遺伝的情報を知ることを意味する。その意味でヒトゲノム解析による遺伝子レベルでの情報と技術は、21世紀において新たな生命観をつくりださざるをえなくなる。生命倫理学会ではこれは避けることのできない問題であるとして、この問題をシンポジウムで取り上げることとした。

このテーマを推し進めるにあたり、自治医科大学の高久史麿氏と日本大学の山田卓生氏を司会として、シンポジストは慶応義塾大学の清水信義氏、埼玉医科大学の村松正実氏、日経 BP 社の宮田満氏、京都大学大学院の位田隆一氏にお願いした。しかし位田氏が急用で出られなくなったので、代わって青山学院大学の坂本百大氏になった。ヒトゲノム解析とヒトゲノム研究の現状と将来の展望についての報告と生命倫理にかかわる論議がなされた。

またワークショップとしては、2000年で脳死と臓器移植の法令が国会を通過して３年目になるので、その問題を「脳死と臓器移植の３年後の見直し」として取り上げることとした。脳死と臓器移植の問題は取り上げられてから継続して論議された問題で、今回は会長中谷瑾子氏が引き受けられ、演者には神戸大学の丸山英二氏がなり、この問題を論議した。

近年問題になっている看護上の問題である、「終末期医療の看護あるいは在宅看護の問題」も扱うこととした。この問題を日本赤十字大学の樋口康子氏、千葉大学の佐藤禮子に司会をお願いし、演者を聖路加看護大学の川越博美氏、セコメディック病院の吉田千文氏に依頼した。この問題は今後の医療看護の重要な問題であり、大いに議論を呼んだ。

いつの時代にも問題になることであるが、医学においては人体実験をせざるをえなくなっている。この古くて新たな問題を「医学における人体実験」として取り扱うこととした。大阪市立大学の土屋貴志氏と仏教大学の村岡潔氏に司会をお願いし、演者は土屋貴志氏、国立癌センター病院の佐藤恵子氏、高知医科大学の佐藤純一氏であった。これは近代医学から溯り論じられたが、医学において避けられない大きな問題である。

インフォームド・コンセントの問題も、今日避けられない問題で、今回は、民間で活躍されている、ささえあい医療人権センターの辻本好子氏に今までの経験を生かし、特に民間人の立場を強調し、「インフォームド・コンセント」を扱ってもらうこととした。辻本氏は民間人の遠藤順子氏と高橋卓志氏の両者を演者にして、この問題に取り組んだ。これまでとは違った立場でインフォームド・コンセントを取り扱い、視点が違うとインフォームド・コンセントの見方が変わることで印象深かった。

また今日、女性の問題が何かと問題になっているが、今回はテーマを「女性の身体」に絞って、リプロダクティブ・ヘルスという形で取り扱ってもらうこととした。この問題は旭川医科大学の松岡悦子氏と明治学院大学の柘植あづみ氏にお願いし、松岡氏を司会とし、大阪大学の萩野美穂氏、柘植氏、松岡氏を演者とした。女性の身体について、文化人類学、歴史学、フェミニストの立場に立ってのアプローチであった。

そしてさらに、本大会のテーマ「医療情報と生命倫理」と関係が深い「医療政策と医療経済」も取り上げることとした。司会は京都大学の西村周三氏となり、演者は「医療制度と社会意識」と題して国際医療福祉大学の田村誠氏、「臓器移植における臓器分配の効率性と公平性」と題して慶応義塾大学の池田俊也氏であった。医療制度が社会において果たす役割と臓器移植の分配が社会において及ぼす影響が論じられた。

特別講演は、米国のジョージタウン大学のケネディ・インスティチュートの開設以来、客員教授を20年間もつとめ、日本にバイオエシックスを紹介し、最もバイオエシックスについて理解ある人の一人である早稲田大学教授木村利人氏にお願いし、「バイオエシックスと未来文明」と題して、「生命倫理のグローバルな合意」の形成を目指した生命倫理の将来を展望した講演をして頂いた。

本大会はランチョンセミナーを大会史上初めて企画した。本学の第一内科の菊池健次郎教授の発案により、２日間にわたってランチョンセミナーを開き、テーマは「脳死と臓器移植」「遺伝子治療」とした。北大の医学部外科の藤堂省先生が選ばれた題は「肝臓移植の現状と今後の問題」であった。もう一つは大阪大の医学部遺伝子治療学の森下竜一先生にお願いした。先生が選ばれた題は「成人病疾患の遺伝子治療の現状と将来」であった。

一般演題は合わせて47題で、「遺伝子診断と脳死の問題」、「医事法に関する問題」、「リプロダクティブ・ヘルスの問題」、「スピリチュアル・ケアとナラティブ・アプローチ」、「インフォームド・コンセントの問題」、「生命倫理教育の問題」、「看護、ターミナル・ケ

アの問題」、「医療情報と医療政策」と主に８つに分ける発表であった。これは４つの分科会で、２日間にわたって発表され、それぞれ討議された。

本大会は年次大会であったので、評議委員会、理事会、それに総会も開かれた。その他懇親会も開かれ、旭川医科大学の久保学長が挨拶をされ、そして牧野副学長が乾杯の音頭をとられ、なごやかなうちに終えた。本大会は11月という季節で、雪などの心配があったが、幸い天候に恵まれ、無事に終了することができた。

大会は上述の準備委員会の先生方、そして実行委員の先生方、ならびに第一内科の教官と一般教育の教官と事務官の並々ならぬ働きによって無事開催することができた。ここに感謝の意を表したい。いま生命倫理はいろいろな分野で問題になり、一般の人々にも関心を呼んでいる問題である。総じてこの学際的な学会が北国で開かれたことは意義深いことだった。今後ますます生命倫理が問題になり、それにつれ、この学際的学会もますます重要となろう。

学界の動向

第４回日本健康福祉政策学会学術大会を終えて

広　岡　憲　造*

平成12年９月23日～24日、北海道らしい高い秋晴れの中、第４回日本健康福祉政策学会学術大会が旭川市民文化会館において開催されました。旭川医大公衆衛生学講座が全国学会を主催するのは初めてのことでしたが、学内をはじめ道内、道外の保健行政に携わる多くの方々のご助力を得て、成功裡に終了しました。全国からの会員37名、一般参加者118名の計155名の方々に参加していただきました。本学会と第４回大会の様子を簡単に紹介します。

日本健康福祉政策学会は1997年６月29日に設立されました。これまでの学会がともすれば専門家中心であったのに対し、本学会は地域住民も含めた様々な領域の人たちが気軽に参加する事によって、現場で真に必要とされている健康福祉政策を実現させるために設立されました。

日本における公衆衛生活動の主要なテーマは、伝染病、栄養障害等の疾病対策から生活習慣病を中心とする慢性疾患対策、さらには発症予防をめざすヘルスプロモーションへと変化してきました。それに伴い、病原体対策では有用であった医師や保健婦などの専門家主導による体制では十分対応することができなくなってきました。これからは、地域住民が主体的に参加し、専門家はそれをサポートする体制づくりが必要となります。しかし、これまでの医学関連学会では、これらのニーズに十分に応えることができないことが明らかになってきました。これが「政策科学」「地方主権」「市民参加」のキーワードを掲げ、日本健康福祉政策学会を設立した理由です。

このような設立趣旨を受けて、各地に地方会が設立されました。たとえば島根では、住民、福祉、行政、医療専門家に加え、マスコミ、福祉医療関連企業、情報産業関連企業、弁護士など、実に多彩な会員が参加して地方会が発足しています。北海道では北海道保健計画研究会が立ち上がっていますが、残念ながら住民の参加はまだ実現していません。

本学会は「地方主権」を実現する目的もあって、隔年で学術大会を地方において開催しています。これまで東京都、松本市、東京都中野区の順で開催しました。そして今回の第４回大会を旭川市で開催する運びとなりました。以下に、第４回大会の内容を紹介します。

第１日目午前の部では北海学園大学法学部の森　啓先生に特別講演をお願いしました。

演題名は「健康の町づくり：成熟社会の公共課題－

＊旭川医科大学　公衆衛生学講座